様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　４ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００００２７

研究課題名（和文）哲学の新たな展開の可能性に向けた、手話言語研究

研究課題名（英文）Research on sign languages to realize a new development of philosophy

研究代表者
高山　守（TAKAYAMA, MAMORU）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・名誉教授

研究者番号：２０１２１４６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：手話言語を母語とするろう者は、自らの思考を身体画像で展開し、他者に伝達する。この意味で、手話言語は画像言語と言いうる。しかし、それが画像言語であるのは、いっそう根源的な意味においてである。というのも、ろう者は、自らの思考を自らのうちで遂行する際に、その思考を、視覚的に与えられる画像情報に基づき、おおむね、この情報画像そのものによって展開するからである。ここにおいては、この画像による思考内容が、その視覚（画像）世界と完全に一体なのである。この一体性は、カントの提起する直観と概念の相即性をめぐる「権利問題」と密接に関連するが、本研究は、この観点から、現代的な哲学論の新たな展開を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
手話言語は、現在、言語的な観点、ならびに社会的な観点から、注目を浴びていると言いうるが、そうしたなか、これまでは、この言語の画像性が特筆されることはきわめて少なく、むしろ、それはしばしば積極的に度外視されてきた。というのも、これまでにおいては、手話言語は音声言語と相並ぶ、れっきとした一言語であるということが強調され、また、強調されざるをえなかったからである。この強調点は、いまなお強調されてしかるべき状況だが、しかし、それは徐々に変わりつつある。こうしたなか、本研究は手話言語の画像性を前面に打ち出して、それを積極的に論じるものであり、その点で、学術的ならびに社会的意義は、小さくないものと考える。

研究成果の概要（英文）：People who are deaf and have sign language as their native language at their command, move parts of their body, especially their hands, in order to visualize their thoughts in images and thereby convey them to others. Their language essentially consists in visualization through movements. It could therefore be considered a sort of pictorial language. But ‘pictorial’ in this case, ought to be understood in a radical sense. For the deaf people fundamentally think in pictorial entities, that is, they originally form their thoughts on the basis of visual impressions of the world. Here is the possibility that their thoughts are genuinely corresponding to the world that they perceive visually. This correspondence is closely related to "the problem of right (quid juris)" (according to Kant) concerning the correspondence between thoughts and the world. I tried a new development of philosophy from the viewpoint of the correspondence.

研究分野：人文学

キーワード：手話言語　画像言語　画像思考　身体言語　直観と概念

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

手話言語が近年、日本を含め広く世界で、音声言語とならぶ独自の一言語と認知され、さまざまな学問分野において、研究対象として取り上げられはじめている。しかし、この言語が特有の画像思考を伴うということは、これまでほとんど注目されることはなく、また、哲学という分野では、この言語はおよそ無縁な存在にとどまっている。こうした現状が、本研究の背景である。

## ２．研究の目的

こうした現状のもと、手話言語の根底にある画像思考という思考形態に着目しつつ、哲学の領域に手話言語を導入し、それによって、まったく新たな観点から、哲学的な論議の展開を試みること、これが、本研究の目的である。この目的に沿って、本研究は、カントの提起した直観と概念との一体性に関わるいわゆる「権利問題」に焦点を当て、この問題がそのうちに宿す豊かな内実を明らかにする。その際には、現代、この問題を尖鋭な形で論じるマクダウェルの論議を手がかりにするとともに、直観と概念との一体性が自ずと成立していると見うる手話言語およびその画像思考を、論議の要点とする。

## ３．研究の方法

本研究には、第一に、手話言語ネイティヴのろう者から、本言語に関わる主要な情報の提供を受けること、また第二に、その情報に基づきつつ、聴者をも交え、多様な論議を交わすことが、不可欠である。そのために、ろう者 7 名、聴者 8 名からなる研究フォーラムが組織されている。本研究においては、本フォーラムが随時開催されるとともに、ろう者一人ひとりに対するインタビューもまた実施され、これによって得られた諸情報、ならびに、その論議の蓄積によって、成果達成がもくろまれる。

## ４．研究成果

### (1) 手話言語の基盤としての画像思考

本研究は、手話言語に関する新たな発見を基点とする。その発見とは、手話言語を第一言語とするろう者が、まず、自らにおいて思考を展開する際には、その第一言語である手話言語を必ずしも使用せず、おおむね、外界から受容する視覚情報つまり画像情報を、当の画像情報のまま、そのまま使用し、当の画像情報（画像表象）によって、その思考――画像思考――を遂行するということである。実に、手話言語とは、こうした自らの画像思考を他者に伝達しようとする際に、基本的に、この画像思考を映し出す形で、身体表現化されたものと見なしうるのである。

この点を、あるろう者は、こう説明している。

① 思考内容を手話で伝える場合：
　画像を思い浮かべる（手話はあったりなかったり）→手話表現

② 相手の手話を見る場合：
　手話を見る→画像を思い浮かべる→自分の手話に翻訳（内容によっては画像のみ）《全て頭の中》

③ 日本語を読む場合：
　日本語を読む→画像を思い浮かべる→手話に翻訳《全て頭の中》

ここに言う「画像を思い浮かべる」という事態が、画像思考にほかならないが、ここに見られるように、このろう者は、まずは自らの思考を、おおむね画像によって遂行する。また、他者の手話表現を了解する際にも、その了解はまずは画像によって行なわれる。日本語了解の際も同様である。こうした画像思考――画像了解もまた一つの画像思考である――が、他者に伝達される必要性等の状況に応じて、手話表現へと転換されるのである。

手話言語が、このように画像思考と一体であるという事情は、目下のろう者一人に限らず、これまで捉ええた限りにおいては、ほぼすべてのろう者において同様である。たしかに、この画像思考に関しては、個人差がある。すなわち、この画像思考を、手話言語を交えずにほぼ純粋に画像によって遂行する人もいれば、そこに一定程度手話言語が介在する人もいる。その介在の程度も人それぞれである。しかし、総じて言いうることは、手話言語を第一言語とするろう者は、とにかくもまずは、画像思考を遂行しようとするということである。

もとより手話言語は、それ自体、身体言語として画像言語である。すなわち、それは、手の動き等のとりわけ上半身の動き（表情や、頭・肩の動きなども含む）によって呈示される画像もしくは動画像によって表現される言語である。だが、この言語が画像言語であるのは、いっそう根本的な意味においてである。その意味とは、この言語が、その基盤に、かの画像思考を有しているということ、かの画像思考と一体であるということである。

（2）画像思考と手話言語との一体性

この画像思考と手話言語との一体性は、きわめて緊密な一体性であると言いうる。というのも、手話言語を特徴づける表現技法として、NMS (Non-Manual-Signals：非手指動作)や CL (Classifier：類別辞)、RS (Role-Shift：役割変換)や Description (描写)といったものを挙げることができるからである。すなわち、NMS とは、さまざまな心の動きなどを、表情の変化等で表現する技法であり、CL とは、知覚された画像を、手を中心とした身体画像へと一定の仕方で写し取る技法である。また、RS とは、物事を伝達する際に、第三者的な立場からではなく、その物事を実際に語る当人の立場へと、そのつど立場を変換し、その立場から物事を生き生きと語り出す技法、そして、Description とは、周囲の情景等を身体の動きによって自在に描写する技法である。これらは、総じて、さまざまな情感等を伴いつつ展開される画像による思考を、身体表現へと写し取り、この身体表現を通して、このうえなく生き生きとした言語表現を遂行するための技法なのである。ここにおいては、身体言語としての手話言語と、その基盤をなす画像思考とが、完全に一体なのである。

とはいえ、身体表現としての手話言語は、そのすべてが、こうした技法によって構成されているわけではない。画像思考とその身体表現とが一体とは言えず、その関連づけが困難な語（たとえば「黄色」）も存在する。しかし、身体におけるそうした単語表現も、基盤にある画像思考を映し出す身体表現の一連の流れの中に、スムーズに位置づくことにおいてこそ、本来の単語表現として機能するものと見うる。つまり、そうした語も、画像思考と身体表現との一体性のうちに自然と取り込まれていると見うるのである。

（3）手話表現特有の表現形態

このように手話言語は、その根底に画像思考を有しているということから、手話言語が特有の表現形態をとる理由もまた、明らかになりうる。

この特有の形態の一つは、「イベントチェーン」とよばれるものである。すなわち、手話言語においてはしばしば、ひとまとまりの出来事が、時系列に沿って、その流れのままそのままに表現される。そこには飛躍が介在しないのだが、こうした出来事の表現形態が「イベントチェーン」とよばれる。これは音声言語の場合と対比的である。たとえば、音声言語では、サッカーの試合中「強烈なシュート！ゴーール！」などと叫ぶ。ここにおいては、シュートとゴールの間の出来事、つまり、ボールが矢のようなスピードで一直線に突き進むといった事態についての表現が欠落している。だが、手話言語においては、基本的にこうした欠落は存在しない。この一連の出来事がそのままに時系列に沿って表現される。それは、手話言語においては、その根底に画像思考が存在しているからである、と見ることができるのである。すなわち、ここにおいてはまずは、視覚的に与えられる諸情報（画像・視覚表象）が、そのままに把握され思考される。そして、この画像思考が身体表現へと映し出される。それゆえに、身体表現による手話言語表現は、「イベントチェーン」という、時系列に沿って切れ目なく連続する特有の表現形態をとるに至る、と考えうるのである。

また、最近はまり言われなくなったが、手話言語には、やはりロー・コンテクスト性という特性があろう。すなわち、ある例示によれば、ある映画の食事のシーンで、ある男が「おばちゃん、みそ汁残ってる？」と問うと、おばちゃんは「あいよー！」と言ってお代わりのみそ汁をもってくるが、ろう者はこの場面にかなりの違和感を抱くという。なぜなら、おばちゃんは、みそ汁が残っているのかと聞かれたのに、それにはまったく応えずに、頼まれてもいないお代わりのみそ汁をもってくるのだから、というわけである。つまり、音声言語においては、「みそ汁残ってる？」とは、自ずと「残っていたらお代わりください！」とのコンテクスト（ハイ・コンテクスト）となる。しかし、手話言語においては、「みそ汁残ってる？」は、当のコンテクストのみを含む（ロー・コンテクスト）というのである。こうした特性も、ろう者の使用する手話言語が、根底に画像思考を有するということが、少なからず影響していると思われる。というのも、みそ汁が残っているかいないかという画像による思考は、みそ汁のお代わりがほしいという要求とは直接は結びつきにくいと思われるからである。

さらにはまた、手話言語には、哲学的に重要であると思われる一特性がある。それは、因果関係が、この言語においては、理由帰結関係として表現されるということである。たとえば、車の運転中の携帯電話使用が原因で、追突事故が起こったと、音声言語においては日常的に頻繁に語られる。しかし、手話言語の場合、多くの場合、このようには語られない。そうではなく、たとえば、こうである。「車の運転中に携帯電話で話していると、突然前の車が眼前に迫り、もうどうにもならず、ワーッ、ドーンとぶつかる」、と。つまり、ここにおいては、追突事故が起こった、その一部始終が、まさにかの「イベントチェーン」として語り出されるのである。これは、因果関係ではなく、理由帰結関係である。

カントは、因果関係が必然的な関係であることを保証するために、アプリオリとアポステリオリの区別を導入した。因果関係とはアプリオリな関係性であるがゆえに、それは必然的な関係であるというわけである。しかし、手話言語においては、この同一の事態が、理由帰結関係として把握され表現される。そして、この理由と帰結との関係は、自ずと必然的なのである。なぜなら、理由とは、当の追突事故が起こった、その一部始終なのだから、その理由によって、その帰結はつねに必然的に生じるのである。ここにおいては、アプリオリといった概念区分を導入すること

なく、全面的にアポステリオリな了解形態において、必然的な関係性が成立しているのである。
　では、手話言語において、なぜこうした関係性が成立するのかというと、それは、手話言語の根底に、かの画像思考が存しているということによろう。すなわち、かの「イベントチェーン」という表現形態に典型的に見られるように、この言語においては、視覚的に与えられる諸情報（画像・視覚表象）を、その情報形態（画像・視覚表象）のままに把握し思考し表現する。その限り、視覚世界と思考内容とが、自ずと一体なのである。それゆえに、この思考においては、この世界に起こることがことごとく、起こるべくして起こる、つまり、必然的に起こることとして把握され思考され表現されるわけである。ここにおいては、またカントが提起した直観と概念との一体性に関する正当性の問題、つまり、かの「権利問題」が、自ずと解消していると見ることができると思われるのである。

（４）カントの提起する「権利問題」の解消
　そもそもカントが、かの「権利問題」を提起したのは、直観、つまり、その大部分が視覚によって与えられる直観的な内容と、それについて私たちが概念的に思考する概念的思考内容とが、原理的構造的に分離されていると考えられたからである。このように両者は一体ではなく分離しているにもかかわらず、私たちの思考が直観的な世界を捉ええていると言いうるのは、なぜなのか。カントは、この問題を提起し、またそれに答えようとしたのである。
　この「権利問題」を現代、尖鋭な形で再現し、それを解消しようとするのが、マクダウェルである。すなわち、マクダウェルは、この問題を取り上げ、まずは端的な実在論を説く。それによれば、たしかに直観と概念は分離しているように見えるが、しかし実は、それはそう見えるだけで、分離などしてはいない。「カントが「直観」とよぶもの――経験的な受容――は、概念領域外の所与をむき出しのまま受け取ることとしてではなく、すでに概念的な内容をもっているような出来事もしくは状態として理解されるべきものである。私たちは経験において、物事がこれこれこうであるということを受容する――つまり、たとえば見る――のである。」つまり、たとえば視覚的に与えられる経験的な世界は、それ自体がつねにすでに概念的な世界でもある。それゆえに、ここに概念的に展開される思考は、それ自体、この経験的な（直観的・視覚的な）世界そのものをめぐる思考なのだ、という。経験的な世界とは、直観と概念とがつねにすでに一体である端的な実在世界だ、というのである。
　非常に明快ないわゆる対応説の主張であるわけだが、こうした主張をそのまま承認する人はむしろ少ないだろう。実際、マクダウェル自身がその後、微妙な、しかしおそらくかなり大きな軌道修正をするのである。すなわち、マクダウェルは、「私たちに必要なのは、命題的ではなく直観的な内容という着想である」と述べて、「命題的な内容」と「直観的な内容」とを区分するのである。ただし、ここにおいても、直観的な内容はことごとく概念的でもあるという論点は維持する。だが、直観的な内容が、概念的ではあるが、命題的ではないとは、いったいどういうことなのだろうか。
　だが、このようなマクダウェルのまずもっての明快な対応説、さらには、その軌道修正については、手話言語を導入することにおいて、そのいずれをも明確に跡づけることができると思われるのである。すなわち、これまでに見てきたように、手話言語においては、その基底に存する画像思考によって、まずは、視覚的に与えられる視覚世界と、思考内容とが構造的に一体であり、さらには、この構造的な一体性は、実は、視覚世界に関してのみでなく、総じて感覚世界（直観される世界）一般について、言いうるからである。こうした一体性は、かの明快な対応説を全面的に支持する。そして、こうした画像思考は、身体言語として、外へと語り出される。ここに、直観される世界は、概念ではあるが、必ずしも命題ではないという論議を解く鍵があろう。
本研究は、これまでにおいて、こうしたマクダウェルの論議をめぐり、この論議の今後を明確な形で見通しうるところまでを論じた。そして、この見通しを実際に論じきることが、これからの一つの主要な研究課題となるが、まずはこの課題遂行の出発点を明示的に設定した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>高山守、中山慎一郎 | ４．巻<br>704 |
| ２．論文標題<br>手話言語の画像性 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>理想 | ６．最初と最後の頁<br>2-17 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>高山守、中山慎一郎 | ４．巻<br>29 |
| ２．論文標題<br>画像言語としての手話言語－直観と思考の一体性－ | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>シェリング年報 | ６．最初と最後の頁<br>2-15 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>高山守 | ４．巻<br>30 |
| ２．論文標題<br>手話言語における画像性の意味　佐々木倫子氏の疑義に答える | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>手話学研究 | ６．最初と最後の頁<br>1-17 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>高山守 |
| ２．発表標題<br>画像言語としての手話言語　ー直観と概念の一体性－ |
| ３．学会等名<br>日本シェリング協会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|